

子規會誌

久松松平氏の歴史(一)……………久松定武……………一

伊予松山の藩主と文芸……………白田三雅……………九

ガラス戸の外―子規病床の世界―……………越智通敏……………一五

越智二良宛柳原極堂書簡…………………………二四

一一二号

昭和五九年
七月

例 会 記 録

三月例会（第四九四回）

昭和五十九年三月十九日（月） 正宗寺庫裡 出席
二十名

浦屋薫幹事司会により開会。講演のあと『子規遺芳——松山子規会史——』の出版披露。終わって役員会を開き、子規遺芳出版の経過について報告し、頒布方法を協議、なお、会員塩崎月穂編『芝不器男句文集』を松山子規会双書として出版することを了承。

講演 ガラス戸の外——子規病床の世界——

会員 越 智 通 敏 氏

四月例会（第四九五回）

昭和五十九年四月二十九日（日） 子規記念博物館
出席五十三名

浦屋薫幹事司会により総会を行ない、金村治三郎副会長あいさつ、菊池尹男幹事より五十八年度決算なら

びに五十九年度予算について報告、承認。なお、『子規遺芳——松山子規会史——』の出版を報告し、会員の協力を求めた。

終わって、子規記念博物館主催の講演会に合流。

講演 久松松平氏の歴史 久 松 定 武 氏

五月例会（第四九六回）

昭和五十九年五月十九日（土） 正宗寺庫裡 出席
三十五名

浦屋薫幹事司会により開会、越智二良会長あいさつ。

講演 伊予松山の藩主と文芸

会員 白 田 三 雅 氏

なお、本日発行された『不器男句文集』（塩崎月穂編、松山子規会叢書第一六集）の紹介があった。

久松松平氏の歴史(一)

久松 定武

ただいまもお話がありました、今日和田先生は勲三等に

叙勲されました、ほんとうにおめでたい日でございます。また、私にとりましても、偶然でございますけれども、誕生日なんです。八五歳になりました。しかし、気分は八五歳でなくて五八歳のつもりでございますので、今日はみなさんにいろいろとお話し申しあげたいと思っております。ただ、今年はずっと運がわるくて、一月から目を患いまして、手術をしたりなんかして二月いっぱいまで入院しておりました。それから退院いたしました、すこし運動不足のため運動したら、道でころがっちゃったんです。そしたらまた足をわるくしました。この半ばまで入院しておりました、ここにいらっしゃる小笠原先生に非常にお世話になりました。今日はお話ができますが、いつまでも立っていることができません。腰掛けながらお話をさせていただきたいと存じます。

きょうは誕生日でございますから、朝から電話があっちこっちから、南予・東予・中予からも電話がかかる、遠いところではアメリカからも、「お誕生日おめでとう」というような手紙も来ています。電報もいただきました。各方面からお祝いをい

ただいて、心から感謝をいたしておる次第でございます。

そこで、松山藩の城主について話をしようというご依頼でございましたので、つとめていたすつもりではありますが、加藤家とかそのあとの方がたのは、あまり詳しくは存じませんので、私の先祖の中心にしてお話し申しあげたいと存じております。久松家より前の松山の城主の方は、それぞれ転封されたり断絶したりしております。加藤家は福島県の方へ移封されました、のちに孫の代で絶えております。蒲生家もご承知のように絶えております。いったいどういふわけかといいますと、あのころは、城主というものは、当主がおる間に子供がなければ、養子を決めたというのを、早く幕府に届け出なければならぬ、その届けがなかったために、若くして亡くなられると家が断絶してしまふ、こういうことなんです。私のところは養子にあちらこちらから来ていただいておりますけれど、幸いにして今までずっとつづいて今日まで残っているわけでございますが、よく考えてみますと、維新までの三五〇年間の江戸時代を通してみますと、維新の際、朝敵であろうが官軍であろうが、藩によっては藩の内外で大げんかを――戦争をし

ております。たとえば薩摩藩でも、西南戦役といってあの明治一〇年に西郷隆盛があれだけの騒動をおこしている、佐賀藩でもそうです。それから山口藩でも毛利家が官軍の中心となつてずいぶんあつちこつちに戦争しています。

私の家は、維新の際は朝敵扱いをうけましたけれども、先祖が松山へ転封されたのが寛永一二年、今からざつと三五〇年前それから明治になる前まで松山藩内で一度も戦争をおこしてはおりません。たとえば維新の際松山藩は長州征伐に参加いたしましたも大島で負けて帰つてきており、そのとき長州藩が松山の三津まで来ましたが、土佐藩が来まして松山藩を守つてくれた、長州の人が来てても手を出すことができなかったわけです。

それで、松山藩では一つも戦争をしませんでした。いいかえますと、私の先祖は代々戦争がきらいだったといつても差支えないでしょう。三五〇年間ほんとうに戦争はなかったのです。

そこで、私は、家康のことについて申しあげたいのですが、私の家と徳川家康とはどうしても切つても切れない深い縁があるわけなんです。それはどういうことであるかといいますが、すでにご承知のことと存じまするけれども、ここに系図や絵図を出しておりますが、これをちょっと見ていただきたいのです。こういう系図が出ています、これが徳川家康を生みました母の於大おだいの方です。於大の方は、徳川家康を生みましてから三年後に、当時の於大の方の実家が徳川広忠の敵であつた織田信

長の方について、広忠は信長が大きらいだったので、怒つて離縁してしまいました。離縁しましてから三年後に私の家に再婚いたしました一生を終わっています。それで、私の体の中に於大の方の血が入っているかもしれません。於大の方が久松家に入りましてからのち、徳川家康がだんだん偉くなりました。そして、わたくしの家は当時どこにあつたかといふと、久松家の発祥の地といふのは尾張の阿古屋で、愛知県知多郡に今でも阿久比町という町がございます。みなさんご承知でしょう、真珠養殖の母貝にアコヤ貝というのを使いますね、あれと同じ名で、阿久比という町は、昔阿古屋といつたのです。その海岸の湾にできたからアコヤ貝といつたんですね。

この地図をご覧になつておわかりになるように、徳川家発祥の地というのが愛知県の豊田市です、ここでも今でも松平町といふのがあるんですね。この徳川家、家康が天下を取つてから天皇からお許しをいただいて、松平姓をすてて徳川姓を賜つたわけです。それまではずっと松平姓を名のつていました。一門の者に松平姓が多いのはそういうところからきています。それで、於大の方が生みましたのが定勝であります。この定勝と家康が会いましたのが、この阿久比町です。ここでお母さんと家康とが一六年ぶりに会いました。その時そばにいた定勝を見まして、家康は「わたしには兄弟がひとりもない。同じお母さんから生まれたんだから、おまえを弟扱いする。どうか久松姓をすてて松平姓を名乗つてくれ」、そしてここにありますよう

な葵の紋を使えと、こういわれたわけですね。この葵の紋をそれからは使うようになったんですが、この定勝という人も偉いんです。この人はですね、うちがあくまでも菅原道真の子孫である、だから梅鉢を使うのが当然である、家紋はあくまでも梅鉢なんだと、それで私の家では今日でもこの梅鉢を使っております。丸梅鉢とか星梅鉢とか申しますが、最も梅鉢のなかでは古い紋型だそうであります。これは学者の説でございます。それで、この定勝は松平姓を名乗ったんでありますが、紋所はあくまでも梅鉢だ、公儀の場合だけ葵を使おうということになったんです。松山城をご覧ください。松山城の瓦にはひとつも葵の紋は使っておりません。全部梅鉢です。そういうような点はそこから来たということをご諒承いただきたいのです。

それならば、知多半島のつけ根の阿久比町にいつ住むようになったのでしょうか。菅原道真が罪を蒙って太宰府に流されたね、それは延喜年間です。今から一一〇〇年以上も前、菅原道真の一家は京都にいられなくなって、道真の長男の高規は一家をひきつれてこの阿久比町に移ったんです。まもなく道真が太宰府で亡くなると、宇多天皇が、あれは讒訴でいいかげんに罪にしてみましたとあやまり、今後は一切を取り消して、道真は亡くなったけれど、もとの右大臣に任ずる、そして高規以下は京都に帰れといわれたわけです。それで高規は帰りましたけれども、その子供である雅規という人は、わたしは九つの子からここにいたので、いまさら京都に帰るのはいやだと残っ

たのです。これが大変に温厚な人で、善政をしきまして非常に地元の人たちに信望があつく、親しくしとったのです。この人が幼名を久松麿といったんですね、それで、雅規から一四代目の道定という人が、もうわたしは菅原姓をすてる、そしてここにお世話になったその久松の最初の人の久松麿を姓にするといつて、江戸時代になるまで久松姓をずっと名乗ったわけなんです。この阿久比町に久松家は六五〇年間おったようなわけでございます。そして、ひじょうに全盛をきわめまして、最初は地頭、それから城主になりまして、戦国時代は織田信長方の武将であつたんですね。織田信長に信頼をうけとつた人なんです。ところが家康は、お父さんは織田信長が大きらいな人だっただすけれども、人質として織田信長に預けられました。ところが信長は、将来性のあるかわいい子だ、非常にできる子だといふんで助けた。幸せなことにそれで家康はあれだけの出世の糸口ができたわけでございますけれども、家康がもし今川義元の方についていたら殺されていたかもしれませぬ。家康のお父さんの広忠は自分の部下に殺されとりますが、それは今川義元についているといつ徳川家が全滅するかわからない、だから殺しちゃまえ、そのほうが徳川家のためだといふんで、部下に殺されたわけです。そんな悲愴なこともあって、家康はほんとに若いときから苦労した人であります。

私は昨年アメリカのサクラメントに行つて驚きました。それはどういふことかといひますと、毎日テレビを見ますと、どこ

へ行っても徳川家康のちょんまげの姿が出てくるんです。あっちでもこっちでも、それがカリフォルニアだけでないんです。

全米を通じてたゞいま家康の芝居が出てくるんですね。いったいこれはどうしてかといいますと、今アメリカで大変な人物だと評判なんです。どういうところが評判かといいますと、なるほど家康としては戦争もやった、しかし最後の願いは天下大平、いいかえますれば平和運動、それをねらった、そして家康はついに江戸幕府をつくり、その基礎をつくって、江戸幕府が明治になるまで三〇〇年間は外国とも戦争しなかった、国内もほとんど内乱がなかった、初期は島原の乱などがありました、それからのは平和がつづいた、こういうふうな世界の平和を三〇〇年もつづけたという英雄は実例がない、この家康こそほんとうに平和を好んだ人だ、大した人物だというんで、アメリカではたいへんな勢いで徳川家康を研究しております。そして、日本で出した徳川家康の本がほとんど英訳されて、本屋へ行くと家康の本があっちにもこっちにもある、それほど家康のことを研究しておりました。最初、ハワイやカルフォルニアは日本人が多いからやっているんだらうとこう思つとったんです。ところがそうじゃない全米を通じてやっております。帰国後NHKの方に伺いますと、今日日本でいちばん家康の研究をしているのは大阪と名古屋で、ひじょうな勢いで研究されておるそうです。ですから、われわれも、徳川家康をただ戦争を好む男だというふうな、あるいはよくいわれるようにホトトギスの

例にならって、ホトトギスが鳴くまでまとうなんてことではなしに、しんぼうの強い人ではあつたけれども、平和を念願として天下泰平を実現した、そういうことの研究が日本で欠けているように思ふのです。家康の研究はそういう面にもつとあたってみる必要があるらうと考へております。

いま、私たくしの先祖の発祥の地である阿久比町に行きますと、先祖のおりました坂部という城があるんです。そこにずっとおりましたんですが、その地図を皆さんにさしあげます。定勝のときにこの二つの判をつくつたんですが、参勤交替で江戸に行くときとか松山へ戻るような場合には、葵の紋と梅鉢の紋の両方つかった、それから軍船にも両方つかったといわれております。ふだんは梅鉢で、公式の場合、たとえば辞令なんかをわたすような場合や、禄高を書いたものをあげるような場合には葵の紋をつかうことはよくあつたんですが、ふだんは梅鉢だったことをみなさんに知っていただきたいのです。あえてこういうことを申しあげておきます。

この久松家の系図ですが、この私は久松家の何代目ですかとよく聞かれることがあるのですが、その時、私は一七代目でございませうというんです。どういうわけかと申しますと、この定勝というのは藩祖なんです。於大の方が俊勝と結婚して定勝が生まれており、定勝が病いが重いとときにもう家康は亡くなつておつたので、二代將軍が三五万石を与えようとした。定勝は桑名の城主になっておりましたが、本人はそんな欲はない、



(松平定通画像)

いただきかねますとことわっております。それで幕府のお使いがひじょうに困ったという話がありますが、亡くなってからのちに、定勝の子どもにそれぞれ分けて、合計三五万石にしてやろうと、こういうことになりました。

最初の松山藩主が松平定行、道後の常信寺にお墓がございますね、これが初代。松山市あたりでは初代の城主を標準にして定勝は標準にしておられません。そこにくいちがいがございませぬけれど、松山市からいわせれば定行公から私を見れば一六代、私は藩祖からふつういうので一七代ということになるんですね。松山藩では歴代の藩主が文化の面にひじょうに力を入れております。たとえば神社仏閣の興隆はもとよりのこと、学問の点においても歴代の方がひじょうに力を入れております。俳句も盛んにやったのも事実であります。そのなかで、たとえば東校にある明教館、あの建物は一一代定通がつくったもので、当時の藩の学校であって、侍の子弟を中心に、あそこに入れて勉強させたものです。それから定通のときに東雲神社も完成しました。定通は、大正天皇から、大正五年二月に正四位の位をたまわっております。当時、中興の祖といわれるようなこのような名君に対しましては、明治以後でも、本人が亡くなってもあとから位を贈られることがあったのです。

それからもう一つ申しあげたいのは赤穂義士についてです。赤穂義士は仇をうった翌日四軒の大名の家に預けられたんですね。その四軒は、外様大名が長門の毛利家、熊本細川家、そ

して親藩が松山の久松家、そして於大の方の実家の一門である水野家です。そして、赤穂義士四七士というから、四七人の墓が全部泉岳寺にあるかという、それはまちがいで、四六人しかありません。それから芝居と実際の赤穂義士の活動とはずいぶんちがっています。この点をお話し申しあげて、事実を知っていただきたいのです。それで、四代藩主定直という人の代に、松山藩に赤穂義士が預けられてから切腹するまでの記録がすっかりこれに残っております。これは写しであります。なお、赤穂義士以外に松山のことを聞きたい、知りたいという気持ちのある場合に備えて、明治二〇年ころ、松山藩の記録をまとめようと久松家にあるものだけでなく、一般の方が持つてらっしゃるものも将来散逸して歴史がわからなくなる、そこで『松山叢談』というものを私の父がつくれというのでつくったんです。これは再版本ですけれど、本物はずっと大きいんです。これをご覧になると、代々の人を中心として、その人が生まれてから亡くなるまでの記録を全部あつめてありますから、ひじょうに参考になるというところをご承知おきいただきたいのです。明治になってから藩政を書いたものは全国でも松山藩以外ないそうです。いま東大あたりでもこれをひじょうに参考にしており、貴重なものだと東大の先生がいわれるくらいで、こういうたものがあるんだということをご承知いただきたいと思うのです。

松山藩は中くらの藩です。大きな藩ではない。そうかといつて小さな藩でもないのです。ところで、宇和島の伊達家は明

治になって侯爵になりました。伊達家は一〇万石でしょう。ところが松山は一五万石、それが伯爵です。伊達の方がひとつ位が上です。それはどういうわけかという、伊達家をご承知のように朝敵でなかった。皇室を中心にした官軍の方ですね。ですから藩が小さくても侯爵なんです。ふつうは一〇万石以上は朝敵でなければ侯爵ですね、伊達さんのはあれがふつうなんです。ところが、本家の仙台の伊達家は五〇万石ちかいの伯爵ですね。それは朝敵だったからですね。そういう関係がございまして、そういうようなことも知っていただきたいのです。そして、久松家は朝敵といっても相手方と戦争はあまりしておりませんし、できるだけ避けました。ただわたくしの曾祖父と祖父は、維新のさい、短期間ではありますが、慶応年間に江戸幕府の老中をしています。そういうような関係で名こそ朝敵になつておりますけれども、それほど宮中に対しての反感はなかったですね。それだけに苦しいところがあつたけれども、戦争だけは避けていたということがいえるのであります。

それからみなさんに知っていただきたいことは、藩制ができましたから九名の家族はいついどこに任んでいたかということです。江戸幕府が、大名の家族はみんな江戸に住め、郷里に住んではいけない、いかえれば体裁のいい人質をとる政策をとつたのです。全部江戸に住まわせて、いざとなれば家族をおさえてしまう、そういう点があるんですね。家族の者がこつちへ戻ることは、お許しをえなければできなかったのです。です

から、私の先祖の墓はほとんど東京です。一部だけこっちにございます。江戸で亡くなった人のお骨をもってこっちに埋めたり、あるいは高野山に置いたりすることもございましたけれど、大部分の方は江戸で亡くなっておるといことがいえるわけですね。それから、もうひとつ皆さんに申しあげたいことは、この江戸との参勤交替はどのようにしていたかといいますと、いろいろの政策上、京都の御所ともつながりがございますので、松山藩の詰所、今のことはいいますれば京都に県事務所があるように、藩の事務所が京都にもあり、もうひとつは大坂にも詰所がありました。大坂では大坂の商人たちと米の取引をしたり、金を借りたり、財政関係からその事務所は大事だったのです。江戸の方は幕府との直接の関係から屋敷を持っています。当時の江戸の屋敷というものはどうかというと、ふつう大名は上屋敷・下屋敷、なかには大きい藩では中屋敷というものも持っていました。上屋敷・中屋敷・下屋敷と三つあったんですね。松山藩の上屋敷は、今の所在地でいいますと芝の愛宕町です。慈恵医大病院のあるところがほとんど松山藩の土地であったわけです。それから中屋敷は三田四国町、慶応義塾とイタリアの大使館のあるところ三〇、〇〇〇坪あったといわれています。そしてここに、わたくしの先祖と家族の者は住んでおりました。この上屋敷はどういうものかといいますと、主に藩の事務をとるところです。そして、松山藩から上屋敷・中屋敷にお侍さんが駐在し、その数は多いときには五〇〇人、少な

くとも三〇〇人はいたといわれております。そういう屋敷があったんです。それから下屋敷というのは、主にお客さんたちを泊める屋敷につかわれたといわれております。そのほかに小さな別荘みたいなのがあちこちにありました。これは、徳川家康のときに、江戸幕府からおまえはここにこういう屋敷をつくれということ命ぜられてつくったものであります。そして、この定勝という人は、家康から自分の弟だということがかわいがられたせいもありますが、この人の子である藩主定行は、徳川家康がお仲人をいたしましたして、島津藩から嫁さんをもりました。また、私から四代前の定穀という人は島津家から養子にきております。それから、私の母も島津家から来ています。また、定行のころにも二人までも鹿兒島から松山へ来ております。定行の奥さんは主人思いで、この松山の築城のさいにはお手つたいをしております。加藤嘉明が松山城をつくったときには、松山の城山は松林の疎林であって、なんにもなかった。これではいけないということで、定行は、鳥をあつめるためいろんな実のある木をもってきて植えたり、蒔いたりしたのです。それに応じまして、定行の奥さんは、日向と鹿兒島から椎の実をうんともってきて蒔いたのです。それが今日あの城山のジャングルができた基で、城山の大きな木というは松はほとんど枯れてしまつて今は椎の木ですね。ところが、それが鹿兒島や日向から来たということがはっきりとわかるんですね。それはどういふわけかといいますと、城山の椎の実のどんぐりを拾ったことの

ある人はわかると思いますが、小さいでしょ。付近にあるふつうのドングリより小さい、日向とか薩摩の、九州の方のドングリは小さいんです。松山の方にあるドングリの方がよっぽど大きいんです。それで九州からもってきたということがはっきりとわかるのです。

それから東野です。あの東野は定行公がつくったんです。六〇歳で引退をいたしましたして、城主は息子にまかして東野に移りましたが、これはなにも贅沢な生活をするためではありません。ひじょうに産業に深い関心のある人だったんです。たとえばタルト、あれは本来はどんなものだろうと、私も外国へ行くたびに聞いてみたんです。米国ではタルトのことを *Tart* といいます。フランスではタール、スペイン・イタリアではタルタ、それからポルトガル語になつてはじめてタルトといいます。ですからポルトガルの人からはじめて定行が知って、それを松山へもつてきてタルトのもとをつくったんです。これは、明治になるまでは松山藩の独得のお菓子として一般につくることが許されなかったもので、明治になって自由になり、今ではどこでもタルトをつくるようになりました。ところが、タルトがなぜそうなったかと申しますと、定行が松山の城主になって間もなく、長崎の探題を命ぜられたので、長崎にもちよいかい行つておりました。あるとき、ポルトガルの軍艦や大きな商船がうんと入って来て、何をしでかすかわからないような騒動があったんです。そのとき、取り締りを命ぜられて、松山から軍船が

一〇〇艘もむこうへ行つたことがあるんですけれども、ポルトガル人は別に戦争する意志はなかったので、いろいろの技術をおそわつたり、日本のことを教えたりした。このタルトが長崎にないんです。ポルトガル人から聞いたのをそっくり松山へもつてきたもんですから、長崎を飛びこえた恰好なんです。それからもうひとつ知っていたことはカステラー。

あれは英語でいうお城のことです。キャッスル。フランスではお城のことをシャトー、イタリアではカステイル、スペインやギリシャだとカステラというんです。ですから、カステラというのはキャッスルです。お城のある町のことをカステラという、そういう地名が残っております。そこへ行くとお城があります。松山の城下町みたいなものです。カステラは城下町のお菓子という意味なんです。

昔のことをさぐってみると意外なことなんです。それじゃ、カステラというのはわかつたけれど、タルトというのはどういうわけだということになります。タルトというのはサンド・ケーキです。サンド・ケーキのひとつをタルトというんだというところが、英国に長いこといたもんですからわかつたんです。

(子規記念博物館特別展記念講演、松山子規会五月例会講演)

(前愛媛県知事)

伊予松山の藩主と文芸

白田三雅

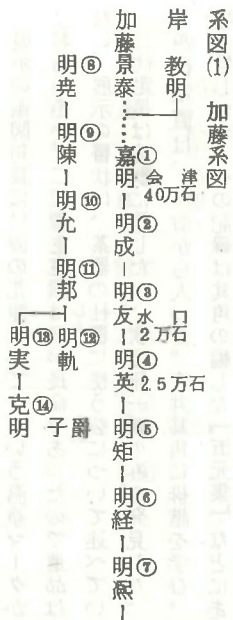
関ヶ原の戦いに徳川家康に属して功名をあげた加藤嘉明は、正木（松前）六万石より、松山二十万石に増加され、慶長七年、松山平野の中心地・勝山に築城をはじめ、翌八年、家臣団を率いて正木より移り、松山と名づけて城下町の建設を行った。それ以来二百七十年にわたる歴代城主の文蹟を明らかにし、新しい文化の創造に資するため、今回子規記念博物館で、特別企画展「松山の城主展」を開催した。いまその概要につき解説を加え、ご参考に供する次第である。

今回の展示は、一 城主の風貌、二 松山築城、三 花開く文化、四 耐乏からの創造、五 難局打開のコーナーに分けているので、以下その順に説くこととする。

一 城主の風貌

初代城主・加藤嘉明は、秀吉に見いだされ、賤ヶ嶽の七本鎧で名をあげてから累進し、寛永四年には、会津若松四十万石に転封され、その子孫は系図(1)のように水口（滋賀県）二万五千石で幕末に至った。嘉明の肖像は現在、水口町図書館にあるため、今回は写真によった。

嘉明のあとを受けた蒲生忠知は、祖先の地近江日野（滋賀県）



と併せ二十四万石で入城したが、寛永十一年病歿、子がないため断絶した（系図(2)参照）。彼の肖像は市内円福寺に秘蔵され、本尊に準じて礼拝されているので、写真で示した。久松家は、九代定国から以下、定則・定通・勝善・勝成・定昭の肖像を展示し、これに添えて、定紋入り軸箱、久松松平家譜、武家法度

に準ずる、政要記、御船印帳、十三代勝成が、明治三十二年茶会の折に、著名人の筆蹟に肖像を加えて装ていた千載集、四代定直が、京都の俳人に書かせた短冊を屏風に仕立てた御船屏風、藩主所用の陳羽織、野袴脚伴を出している。

二、松山築城

慶長七年築城にかかり、五層の天主閣をもつ城が完成するのには二十六年を要したが、ここでは、嘉明が東本秀重に与えた互受取証と、秀重あてと柳沢嘉平次宛知行状、お能の書状がある。東本秀重は、もと秀吉に仕えた六万石の大名仙石権兵衛の弟で、武田勝頼を討って功名をあげ、東本の姓と秀の字を与えられた大名であったが、朝鮮役のとき、病気で行けずその勘気なふれたのを嘉明が百三十石で召しかかえた人物で、後に定行に召されてお庭焼を焼いた瀬戸助はその五代の孫である。

また、珍しいものに、家康と織田信雄が、小牧・長久手に秀吉と対陣したとき、羽柴三郎兵衛に与えた指令状もある。さらに、松山城古図（元禄ごろのものを近年筆写）や、明治十七年に天主腕が破損した折、前記東本が再建のために造った雛型もある。

次のコーナーは、初代松平定行の質状と孫娘おまんの縁談の手紙、貞享年間の領知状、定行が長崎探題に任じられたときの陣構行列絵図がある。さらに、徳川家康の書状、三代將軍家光の歌小色紙、定行の弟・定政が隠棲した東野吟松庵図、そこで定政が刻んだ十王像四体、欄間飾、安心庵板額、軒飾りの葵紋

などを展示している。定政は、家光に愛され、蒔屋二万石を領して、旗本頭をしていたが、部下の窮状を察し、救済の諫言をして容れられなかったため、自ら禄を返上、「不白」と号し退隠した。後足定行に預けられ、茶に遊んで終わったが、茶道不白流の祖でもある。

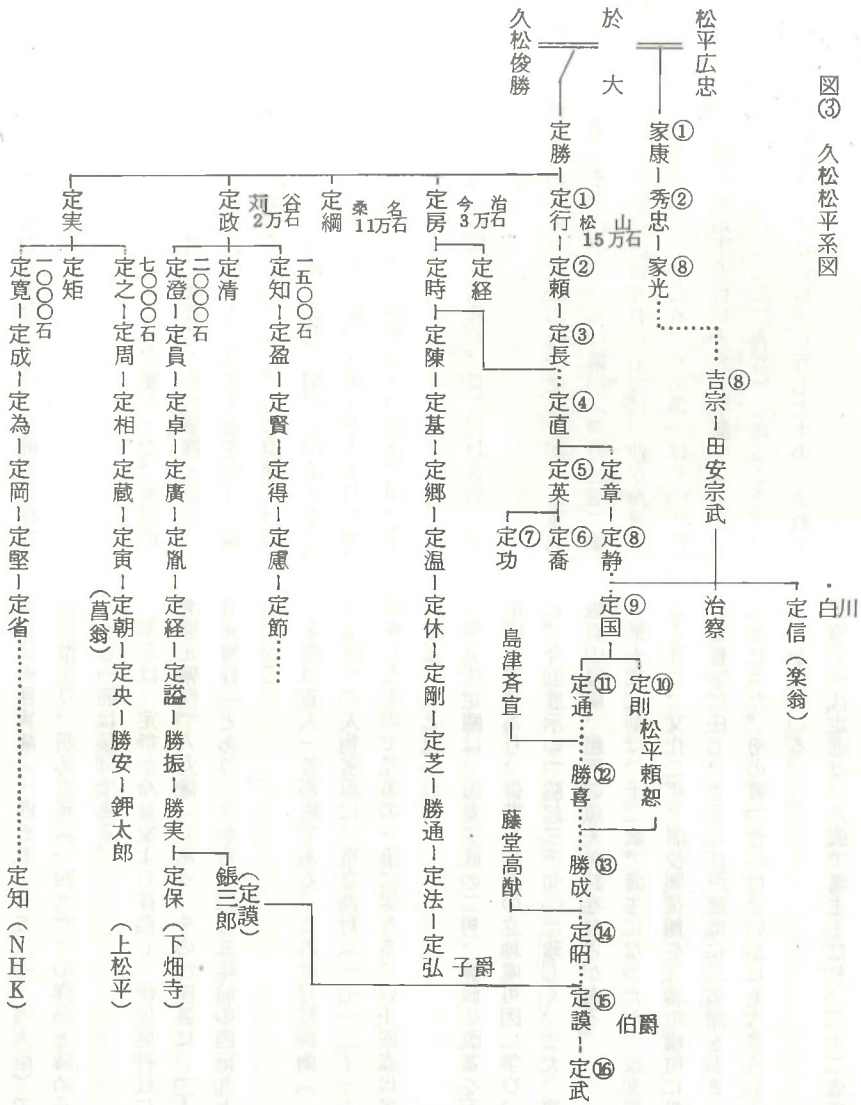
三、花開く文化

久松松平氏の祖は定勝である（系図③参照）。家康を生み松平広忠から離別された於大の方が、久松俊勝に嫁して生んだのが定勝で、家康は弟として松平姓を許し重く用いた。ここには彼の歌短冊と百人一首がある。定行は松山藩祖、寛永十二年八月入城したとき、沿道の家は草葺で、人々は無地木綿の着物で出迎たという。

展示の雀図句簀には彼の花押として今でいう温泉マークがありおもしろい。二代藩主定頼は父が長命であったので遺品は少ない。展示の書状は、茶器の仕覆しほりに使う裂あはれについて述べている。三代定長は連歌に長じたが、歌短冊一葉のみを発見した。

四代定直は、今治から入った。宝井其角に俳諧を学び、三嘯と号したが、その記録は其角の編した『五元集』などにある。歌は冷泉を学び、元禄の宮川長春の肉筆浮世面に歌簀もしており、また、学問を好み、大高坂芝山に南字を、大月履齋に崎門学を講じさせ、さらに大山為起を呼んで日本書紀を講じさせるなどした。元禄十五年、赤穂浪士・大石主税以下十名をあざかり、厚く遇した記録も残されている。このほか、書状や先祖寛

図③ 久松松平系図



書などがある。ここで附言すると、定直夫人に仕えた成瀬維佐（大高坂芝山妻）は、女訓『唐錦』を著すなど、花開く元禄文化の先頭に立ったのが定直と言える。

四 耐乏からの創造

定直を継いだ五代定英は、めぐり合わせが悪かった。治世の晩年・享保十七年には、長雨に続く蝗害のため大饑饉となり、餓死者三四八九人、牛馬の斃死数千頭という大災害を受け、幕府より「裁許不行届」と差控えを命じられた。彼の遺墨には詩書・書状があるが、なかなかの出来であり、闇君とは思えない。六代定喬は書画をよくし、特に画は鯨、大蛇など大きなものを好んだという。彼の十二歳の書や、晩年の一行書は見事である。

第七代定功は、野牛と号し俳諧を嗜んだ。ここには俳諧一点だけを発見した。

第八代定静は分家定章の子で、定功の後を受けたが、冷泉為村に学び歌をよくした。その作品のうち、柳溪（狩野邑信）筆雷鳥画賛はおもしろい。とくに注目されるものに、彼が冷泉家より入手したと思われる次の品々がある。その第一は、『八代集』である。これは、古今集以下八代にわたる歌集であるが、その巻末奥書に『貞応元年（一二二二）書写』とあることで、これは今から七六二年前のものを元禄頃に写したものとされている。

その第二は、『源氏物語』五十四帖である。筆者は室町中期

の菊亭右大臣公興（今出川氏八代、一四四六～一五一四）、題字は三条西実隆（一四五五～一五三七、内大臣）であり、前後の事情より、明応五年（一四九六）の作品と認められる。ただしうち一冊は後補である。

第三は、定静が冷泉家より拜領し、伊佐庭神社に奉納した。清原元輔作「人丸像」である。その台座裏に、「天元二年卯五月元輔作」とあり、今から一〇〇五年前の西紀九七九年のものとなる。

第四は百人一首画帳である。これは狩野探幽（一六〇二～一六七四）の人物密画に、冷泉為村（一七二二～一七七四）が歌賛をしたもので見事の一語に尽きる。以上四点は名品と称するに足るものと思われる。

第九代定國は、田安宗武の二男、寛政の改革を行なった老中定信の兄であり、俳諧を江戸の立地庵可因に学び、阜禽と号した。今回展示の「脇起三千句」は珍しく、また、書にも優れ、蛾眉山屏風、屈原の魚夫辞詩巻などがある。

第十代定則は、十二歳で藩主になったが、叔父定信の教訓をよく守り、文化二年、藩校興徳館を三番町横町に設け、杉山熊台を督学に任じ、さらに江戸藩邸に三省館をおき、子弟の教育にあたった。その書「竹」は、いかにも大名らしく、のびのびと書かれている。

第十一代定通は、六歳で藩主となり、三十二歳で歿したが、叔父に教えられ、文武の道を励まし、「明教館」を創設、日下



(松平定国画像)

五 難局折開

第十二代勝善のころから藩の財政は苦しく、儉約の励行、国産の奨励、綱紀の粛正など、改革政策を進めるが、江戸城や皇居などの修復献金、天守閣の再建など、出費はかさむばかりであった。とくに幕末、二度にわたる長洲征伐、ことに二度目は屋代島に攻め入り敗退した。続く鳥羽伏見戦では、梅田の守備をし、徳川慶喜の東走によって急拠帰還したが、朝敵とされ、ついに恭順を決した藩主父子は常信寺に謹慎した。松山城は土佐藩が占領、三津浜に上陸した長洲藩の杉孫七郎(聴雨、後子爵)は、恭順の実を見るため常信寺を訪れた。このとき、朝廷に対する藩主父子の真情が「赤心報国」の書に示され、新政府に十五万兩を献金して許されるのである。

伯巖・高橋復斎を教授にあげ、本格的な学問体系をつくった。このときから「朱子学」を本流とすることになる。また、社会の充実や、松山耕の奨励も行なった。彼は漢詩に長じ、「いっ非修館遺稿」を残しているが、詩書・和歌など遺品も多い。

さて、久松一門の定実の後えいに、旗本松平定朝がある。彼は寛政のころ京都町奉行をつとめ、退隠して花苜蒲の改良にとりくみ、生涯に二百種の新品種を育て、その道の先駆者といわれる。号を苜翁と称え、その最も得意の作品や、草花図が展示されている。

また、明教館で年頭講書初に講義したという『白鹿洞揭示』(日下伯巖筆)も出展している。

ここには、このほか、勝善夫人久子の歌短冊、長洲征伐の指令書、十四代將軍家茂の詩書(彼は二十一歳で歿したので、これは十四歳ごろのものと思われる)。十五代定讓の父で、旗本松平勝実の書、彼は慶喜の小姓頭で、終始行を共にし、晩年は松山へ退耕、梨栽培をはじめ、本県果樹界の先駆者でもある。

十三代勝成は、明治四十五年まで生き、その詩書・手紙が残されている。

十四代定昭は、幕末、老中首座となる器量があったが、家中の意見により退き、難局に処して、三上是庵、大原観山等の意見を探り進退を誤らず、明治五年二十八歳で病歿したが、漢詩をよくし『漢台遺稿』を残している。彼の詩書、臨終書、三津

浜の商人に与えた手紙などがある。また、勝成夫人令子の歌懐紙、島津茂久(後の忠義)の手紙、明治四年の知事辞令もある。

また、茶道は裏千家を召かかえている。初代定行が東野に隠居所を営むとき、千宗安に命じて数寄屋と庭園を三年がかりで作らせ、堀の内に邸を与え、以来二百石を給して茶道を教授させたという。ここには、十一代玄々斎宗室の、松山藩茶道方富田宗春に与えた手紙、慶喜の女中頭であった花の井局に与えた免許状などを示した。

さらに藩主の印がある。ここには、十二代勝善(宣郷・定毅)九代定国(蘭隠・月兎)十四代定昭(子桓・漢台)、ほかに藩主、久松家のものがある。

さて、ここで主要な人物像を見ることが出来る。加藤嘉明は、戦国大名として勇猛をうたわれ、家康に高く評された。その会津転封は、平素仲の悪かった藤堂高虎が、北国の固めとして強く彼を推したことによる。これをあとから聞いた嘉明は、高虎を訪れて平素の行いをわびたという。また、茶湯・能にも通じており、戦災で烏有に帰したと伝えられる、府中屋念齋か、宛書状にその人情家ぶりほうかぐえた。

蒲生忠知は、入城以来、戦国動乱に疲弊した農民をいたわった名君であったことは、徳川隠密の「讃岐伊予土佐阿波探案書」によって明らかである。

久松松平氏は、入封以来二百三十五年、代々文武を励まし、茶湯・俳諧・和歌を嗜み、あるいは漢詩に長じた。こうした土

壤から、俳諧の粟田樗堂、儒者の大高坂芝山・杉山熊台・宮原竜山・日下伯巖、能書に頼翁・伊藤子礼・明月、歌人に田内重史・西村清臣・石井義郷・女流に成瀬維佐・石原玉鶯などの人々を生み、明治に及んで正岡子規を育てたものと言えるのではなからうか。

(昭和五十九年三月例会講演) (松山子規会誌第)

新 刊

松山子規会叢書第一五集

子 規 遺 芳——松山子規会史——

B六版二八五P
頒価 一、五〇〇円 送料 二五〇円

発 行 松 山 子 規 会

松山市末広町正宗寺内
郵便振替 徳島二一八六八

発 売 県 下 主 要 書 店

お問合せ先 菊 池 尹 男

松山市多幸町五一七
電話三一四八四一

全会員のご協力をお願いいたします。

ガラス戸の外―子規病床の世界―

越 智 通 敏

いくたびも雪の深さを尋ねけり

というのがあつた。この句について村山古郷氏は、子規の数多い句の中から、最も好きな句を選べといわれれば、私は躊躇なくこの作を挙げる、それほど私はこの句が好きであり、また、この句は、代表的な秀句の一つであると思うのである、と言つて推奨しておられるが、その理由として、「病境涯の味をにじませた詠嘆」であり、また、「切望と憧憬の感動が深く感されておられ、心境句として深い境涯の意味を湛えている」ことをあげられる（子規全集月報3）。これは二十九年二月ごろの作で、そのころ子規は、左の腰が腫れて痛みがひどく、臥褥のままの状態になっていたから、しんしんと降る春の雪が気になつて、このような句になつたものである。

ところで、この句には「病中」と題があつて、他に、

雪ふるよ障子の穴を見てあれば

障子明けよ上野の雪を一目見ん

という句があり、これによつてわかるように、子規の病室と外界を隔てるものは障子であつた。それが、

ガラス窓に上野も見えて冬籠

と、寝ながらにして上野の森が見えるようなガラス戸にかつたのは、三十二年十二月十日ごろのことであつた。すなわち、十一日の虚子あて書簡に

硝子窓のきゝめ已に昨夜よりあらはれ非常に暖く候 今日

は終日浴光自らガラスを拭くなど大機嫌に御座候

とあり、ご機嫌のあまり、例の菅笠を被つて机に向かうなど、近来にないほど活気が出て、そのため昼のうちに原稿を書いたと書いている（第十九巻、四五〇P）。だから、おそらくガラス戸がはいつたのは、十二月十日のことであつたらう。

この書簡は、実は、ガラス戸を入れてくれた虚子への礼状にほかならないのである。つまり、子規は、ほぼ一昼夜経つた後、夜も暖かかつたこと、昼は終日日光を受けてもちろんたいへん暖かであつたことを早速虚子に告げて謝意をあらわしたものである。夜も暖かだつたというのは、これまで、戸をたててもすき間ができるので添え木がしてあつたり、腰板のすきに紙を詰

めたりしてあるほど、子規の病室は貧寒たるものであったから、きつちりあわせてはめたガラス戸をしめるとすき間風をたつて、夜も暖かだったからである。南受けの部屋が、昼間日光をガラス越しに受けて暖かなことは言うまでもない。

冬の寒さが子規の身にさわることを心配した虚子が、ホトトギスからの贈り物としてこれを入れたのであった。そして、この時、同時に、暖房のため燈爐も入れた。すなわち、同月十七日、漱石あてに、

先日ホト、ギスにて燈爐といふを買ってもらひ且ツ病室の南側をガラス障子に致しもらひ候（第十九巻、四五四P）。

とある。燈爐は石油をたくもので、今日普及している石油ストーブにあたるから、いくら東京とはいえ、明治三十年代に石油ストーブを思いついたことは、虚子がよほど師のためを思ったからにはかならない。この計画は、十月に入って具体化したようで、十月六日付けの手紙で松山の伯父大原恒徳にあててこのことを報じ、五円ぐらいで求められると書いている（第十九巻、四三一P）。ガラス戸も当時の庶民の生活としては画期的なことで、師を思う虚子の情が、このようなものになったことと思われるが、このことについても、事前に話があったであろうが、記録としては残っていない。

ちょうど一年前の三十一年十月十日、松山から移して東京で『ほととぎす』を発行した虚子は、それが軌道に乗った今、子規なくしては成り立たない「ほととぎす」であってみれば、子

規への謝礼をと考えたのであったし、非常な決意をもってあつたほととぎすが、ともかく成功の見通しの中にあつて、これを贈られた子規にとつても、虚子の真情とあわせて、二重の喜びであつたにちがいない。この時のことを虚子は小説『柿二』に書いた。その内容をこがらの上だけでたどると、前の年（三十一年）に石油ストーブを届け、ことしガラス障子を贈つた。そして、不折からはことし燃料として石油一罐が届けられた。さらに翌三十三年十一月下旬、伊藤左千夫と岡麓の配慮により、石油ストーブに代わつて石炭ストーブを据えたということである。ただし、はじめに石油ストーブを入れたのは、前述のように三十二年の方が正しい。

こうして、病室の南の障子をガラス戸にかえたのは、翌三十三年正月の「新年雑記」に言うように、「寒気を防ぐためが第一で、第二には居ながら外の景色を見るためであつた。」そして、結果は、

果してあたゝかい。果して見える。見えるも、見えるも、庭の松の木も見える、杉垣も見える、物干竿も見える、物干竿に足袋のぶらさけてあるのも見える、其下の枯菊、水仙、小松菜の二葉に霜の置いて居るのも見える、庭に出してある鳥籠も見える、籠の鳥が餌を喰ふのも見える、さうして一寸尻をあげて糞するのも見える、雀が松の木をあちこちするのも見える、鶺鴒が四五羽つれだつて枯木へ来たと思ふと直に又はら〜と飛んでしまふのも見える、鶯が一羽黙つて垣根をあ

さりながらふい／＼と飛びまはるのも見える、裏戸あけて木汲みに行くのも見える、向ひの屋根も見える、上野の森も見える、凍つたやうな雲も見える、鳶の舞ふて居るのも見える、四角な紙鳶と奴紙鳶と二つ揚つて居るのも見える、四角な紙鳶がめんくらつて屋根の上に落ちたのも見える、それを下から引張るので紙鳶が鬼瓦に掛つてうなづいて居るのも見える。殊に雪の景色は今年つく／＼と見た。山吹の枝に雪の積んだのが面白いといふ事も今年知つた。(第十二巻、四二四―五〇とよほどの喜びようである。また、たいへん細かい観察が、わずか一か月の間になされてゐることに驚く。しかし意外なことに、日光を受けて日中暖かいことについては、右の文につづけて、

併しこれ等はガラス障子につきて略^は予想した事であつたが、其外に予想しない第三の利益があつた。それは日光を浴びる事である。真昼近き冬の日は六畳の室の奥迄さしこむので、其中に寝て居るのが暖いばかりで無く、非常に愉快になつて終^つには起きて坐つて見るやうになる。此時は病氣といふ感じが全く消えてしまふ。枕もとを見ると寒暖計は九十度近く迄上つて福寿草の蕾は一点の黄をあらはして来た。同、四三二五Pとあることによつて、予想していなかったことがわかる。なお言へば、南を受けて室内が明るくなるということもあるが、子規はこのことには触れていない。すると子規は、ガラス戸の効用を、①寒気が防げる、②外を見ることができる、③日光を浴

びることができるといふ三つに要約してゐるわけである。①と②は重病の子規にとつて極めて重要なことであるし、虚子も主としてこれをねらつたにちがいない。そして、予想に反して、われわれにとつては想像以上に、外の景色の見えることが、子規をして、「見える、見えるも、見えるも」と歎喜せしめてゐる。そこに文学者らしい子規の姿があり、私がこの小論をなすゆえんも、窓の外に見える自然がどのように子規の目にうつり、喜ばして、それが文学の創作となつたかを知ろうとするところにある。

二

ガラス戸のはいる十日余り前の二十二日、子規庵に虚子・青々・四方太が集まつて文章会を開いた。その時のことを書いてよこした「うれし会」といふ写生文をよこした子規の返書に、

あの日虚子に障子あけてもらふて庭の鶏頭の色がうつくしかったのを見て天へ登りたいやうな心持がして其色が今に忘れられぬのを見ても当日の僕の喜びが何等かの原因によりて極度に刺戟せられてゐたことが分る第十九巻、四四四―五Pとあり、その根本的原因が何であるかはわからないにしても、庭の鶏頭の色が美しいのをしばらくぶりに見てこんなにも喜んでゐることがわかる。俳句を生命とした子規は、これまでしばしば旅に出て、旅は俳諧の魂とまで考え、写生のために旅は欠

かせないものとするに至った。それが今は全く旅ができないばかりか、六尺の病牀に閉じ込められていて、時に人力車に乗せられて外出することはあっても、平素は庭さえ見ることができない。それが虚子の温かい配慮によってガラス戸ができる、寝ながらにしてへちまの棚の向こうに青空が見える、座臥すればなおさらのこと庭の鶏頭まで見える。だからその喜びようはたいへんなもので、前に記した虚子あての手紙にあったように、喜びのあまり、いつも掛けて眺めている菅笠をかぶり、机を引き寄せて書くと、いつもは夜もおそくならないと書けない原稿が昼のうちに書けたというのであった。文学者として、写生を重視する子規にとつて、ガラス戸がどれほど大切なものであったかがわかる。

その喜びをまず虚子に伝えて三日後の十二月十四日には京都在住の露石に伝え、さらに十七日には前に記したように熊本のかげの露石に伝えた。その露石への手紙に

ガラス窓に鳥籠見ゆる冬籠

ガラス越に冬の日あたる病間哉

寒さうな外の草木やガラス窓

鳶見えて冬あたゝかやガラス窓

ガラス窓に上野も見えて冬籠

の五句を添え書きした。少し理窟めいてはいるが、これらの中に、ガラス窓にすると、寒が防げ、陽があたって病室が暖かく、外の景色が見えるという、さきに記したガラス戸の効用三つが

おのづから説明されており、さらに、鳥籠が見える、外の草木が見える、鳶の飛んでいるのが見える、上野の森が見えると喜んでいる。ちなみに、鳥籠というのは、例の有名な円形の大鳥籠ではなくて、鶺鴒などを飼っていた従来からの普通の鳥籠のことである。浅井忠の配慮と不折の世話で、福原氏の庭に捨てられていた大鳥籠が子規庵の庭に移されたのは三十三年四月二十日のことだったからである。

ガラス戸の喜びは明けて三十三年の新春まで持ち越された。一月十日のホトトギスに発表した「新年雑記」に、去年の正月と今年の正月では自分の生活に格別違ったことはないが、少し違ったのは、「からだの餘計に弱ったと思ふ事と、元日の蜜柑の喰ひやうが少かった事と、年賀のはがきが意外に沢山来た事と、病室の南側をガラス障子にした事と」ぐらいであると言いついで、(第十二巻、四二四P)、つづいて、さきに引用したガラス障子の効用、特に、「果して見える。見えるも、見えるも」という文が記されている。この年の元朝はガラス戸の喜びに明けたと言つてもよい。この春のガラス戸にちなんだ句に、

鳶の来もせで松の雀かな

恋しらぬ猫や鶺鴒を取らんとす

があり、「草庵にガラスを張りて」と題してある。庭の鳥籠には鶺鴒が飼つてあつた。この鶺鴒は、一年前の三十二年春、虚子から^{つが}番いでもらったもので、早速籠を買つて来て別々に入れて飼つて来たものである(第十二巻、三六四P)。また、新春の歌に、

にひ年の朝日さしけるガラス窓のガラス透影紙鳶上る見ゆがある。新春はガラス戸から明け、寝ながらにして青空にあがる紙鳶を見て正月気分を味わった。

ついで、一月の末日、岡麓が子規庵を訪ねると、「ガラス窓」十二首（第六巻、二六五―七P）を示し、その喜びを歌に托して伝えた。

いたつきの^{なや}聞のガラス戸影透きて小松の枝に雀飛ぶ見ゆ
病みこやす聞のガラスの窓の内に冬の日さしてさち草咲きぬ
朝な夕なガラスの窓によこたはる上野の森は見れど飽かぬかも

冬こもる病の床のガラス戸の曇りぬぐへば足袋干せる見ゆ
ビードロのガラス戸すかし向ひ家の棟の^{なすな}花咲ける見ゆ
雪見んと思ひし窓のガラス張ガラス曇りて雪見えずけり
窓の外の虫さへ見ゆるビードロのガラスの板は神業なるらし

病みこもるガラスの窓の窓の外の物干竿に鴉なく見ゆ
物干に来居る鴉はガラス戸の内に文書く我見て鳴くか
常伏に伏せる足なへわがためにガラス戸張りし人よさちあれ

ビードロの駕をつくりて雪つもる白銀の野を行かんとぞ思ふ
ガラス張りて雪待ち居れはあるあした雪ふりしきて木につ

もる見ゆ

暁の外の雪見んと人をして窓のガラスの露拭はしむ
第二首の「さち草」は、

鉢に植ゑしことぶき草のさち草の花を埋めて雪ふりにけりとある（巻六、二六七P）。「ことぶき草」すなわち福寿草のことであろうか。この歌は、一月十五日に『日本』で発表したもので、一月短歌会での作とのことであるから、一月七日の根岸庵歌会のおりのものであることと、福寿草を歌ったものであることは、「一月短歌会」と題する小文にこの歌をあげ、「福寿草を翻訳して見たるなり」（第七巻、二四七P）とあることによつてわかる。また、この日の歌会稿には、この歌のほかにも選にはいったものとして、第六首「雪見んと思ひし窓の」、第十首「ビードロの駕をつくりて」、第十一首「ガラス張りて」、第十二首「暁の外の雪見んと」の四首が記録されている。なお、この歌会稿には、岡麓にまとめて示したガラス窓十二首にないものとして、

暁の駕鳶の小倉静にて聞の外は雪つもりけり

がある。この歌会には、子規のほか岡麓など十一氏が参会したが、その中に初参加の伊藤左千夫がいた。その左千夫が後に書いた「子規夜話」中の「硝子の駕」に、その時のことを回想して、
新年の歌会に大雪が降った事がある。自分等は遠方であつたから、道の悪いのに弱った。先生は道中の景色なぞ問はれて、斯んな日に硝子張りの駕に載つて郊外を歩き廻つて見度

いなと羨しがられた。其れ程にも外が恋しいのかとお気の毒に堪へなんだ。確か其れを歌にも詠まれたと記憶する。

(別巻三、一五七P)

と言っている。その歌が第十首「ビードロの駕をつくりて」であった。これにあるように、当日は大雪であったため、外に出していた福寿草の鉢を雪が埋めてしまった。花が咲きはじめていたので、かわいそうに思って陽のあたる窓のうちに置いてやると咲きまさってきた。それを歌ったのが第二首「さち草」の歌であった。

第六首に見える向かいの家の棟の薺の花とある「薺」は、春の七草の一つ「なずな」で、ペンペン草ともいう。古い家の棟に薺の花が咲いているのが見えたと細かい観察である。総じて、ガラス戸の外に見えたものは、この薺のほか、小松の枝の雀、上野の森、干した足袋、物干竿の鴉、そして雪である。これで、「いくたびも雪の深さを尋ねけり」という必要もなく、雪景色を楽しめるようになった。そしてここにあげられた見えるものは、ほとんどさきにあげた「新年雑記」にのつてもいるから、これらガラス窓十二首は、昨年末から一月末までの間に観察し、想をあたため、作ったものである。関心は専らガラス窓の外に自然にあったわけである。

三

ついで、四日に開かれた二月例会に発表した歌に、

朝な夕なガラス戸の外に紙鳶見えて此頃風の東吹く

があり、小文「二月短歌会」によると、十一人が互選の結果最高の七点を得ている。弟子たちも、子規が異常なまでにガラス戸の外の景色に関心をもっていることに、ようやく気付いてきたものであろう。この時の歌にはなお、

飼ひおきし鳥を放てばあら悲し黒き鴉が取りていにけり

がある。この鳥はカナリヤだったらしく、前記の鴉のほかに飼っていたものであり、鴉は右のガラス障子十二首にも詠まれている。

三月に入ってもまだまだ寒い。しかし、火鉢と湯たんぼのせいかガラス戸の内は暖かく、ガラス越しに眺める外の景色は寒そうである。

まだ浅き春をこもりしガラス戸に寒き嵐の松を吹く見ゆ

(第十二巻、四四〇P)

そして四月、

ガラス戸の外を飛び行く胡蝶哉(第三巻、三二九P)

と蝶が飛ぶ季節になり、桜も咲いたが雨の日はまだまだうすら寒い。

ガラス戸の外さびしくふる雨に隣の桜ぬれはえて見ゆ

(第六巻、二九一P)

「病牀十日」によれば、これは終日雨に降りこめられた四月十日の作で(別巻三、四八五P)、同じころ春雨を詠んだものに

霜おほひの藁取り捨つる芍薬の芽のくれなるに春の雨ふる
ともし火の光に照す窓の外の牡丹にそゞく春の夜の雨

がある。これは「竹の里人選歌」四月十三日の「春雨」に載っているものであるが、その直後に載っている格堂の「竹の里人のガラス窓の歌に和す」に注目させられる。これは、右の春雨より前の四月七日に選せられたものであるが、ここにいう竹の里人のガラス窓の歌がどれをさすかは正確にはわからない。というのは、右にあげた子規の歌が、十日の作であったり、十三日に選せられているからである。格堂の歌は次の八首である(第七卷、四五八P)。

冬こもる君が庵はビードロのガラスを張りてあかるくなりぬ
曇れるを拭はしむればガラス戸にガラスの板のありとしも
見えず

雪積めば雪の積む見え鳥来れば鳥の来る見ゆガラス戸うれ
し

朝なくガラスの窓に日の照りて闇の暈に松の影あり

ビードロのガラス戸越にいつも見ゆる上野の森は君が歌に
句に

君が庵に歌よみ居ればガラス戸上野の森に薫の飛ぶ見ゆ
ビードロのガラス戸越に日の当る君が衾はぬくゝあるらし
ともし火の火影うつれば鬼や猿や耶穌の見ゆるといふガラ
ス窓

題に「竹の里人のガラス窓の歌に和す」とあるように、ほとん

どが子規の歌にちなんだもので、題材もほぼ同じである。あるいは子規の身になり、子規の話により、その歌にもとづいて詠まれたものであるが、第六首「君が庵に歌よみ居れば」だけは格堂が主格になっている。しかし、これとても題材は上野の森の薫であつて、子規の歌と同じである。ただ、子規の話によることはたしかであるが、子規の話として記録されたものも残っていない、子規の歌にも出てないものを詠んだのが第八首で、ともし火の影がガラス戸に映つて、鬼や猿や耶穌が見えるという幻想はおもしろい。余談ながら、これらの句のうち、私がよしと思うのは第三首の「雪積めば」の歌である。

ついでままとまつたものに子規の「六月七日夜」と題する連作十首がある(第六卷、三二五―六P)。もう梅雨期には入っていたものの、この夜はよくはれて、月に照らされて上野の森が黒く浮かんで見えた。

ガラス戸ノ外ニ据エタル鳥籠ノブリキノ屋根ニ月映ル見ユ
ガラス戸ノ外ハ月アカシ森ノ上ニ白雲長クタナビケル見ユ
紙ヲモテラムプオホヘバガラス戸ノ外ノ月夜ノアキラケク
見ユ

夜ノ床ニ寝ナガラ見ユルガラス戸ノ外アキラカニ月フケウ
タル

小庇ニカクレテ月ノ見エザルヲ一目ヲ見ントキザレド見え
ズ

ガラス戸ノ外ノ月夜ヲナガムレドラムプノ影ノウツリテ見

エズ

照ル月ノ位置カハリケム鳥籠ノ屋根ニ映リシ影ナクナリヌ
浅キ夜ノ月影清ミ森ヲナス杉ノ梢ノ高キ低キ見ユ

ホト、ギス鳴クニ首アゲガラス戸ノ外面ヲ見レバヨキ月夜
ナリ

月照ス上野ノ森ヲ見ツ、アレバ家ユルガシテ汽車行キ返ル
第一首のブリキを屋根にした鳥籠のことは、さきにも触れたよ
うに、二か月ほど前の四月二十日、浅井忠の配慮と不折の世話
で、福原氏の庭で不要になっていたのを庭先に持ち込んだ大鳥
籠であった。直径五尺、高さ一丈ばかり、金網をはり、ブリキ
屋根の円筒形のもので、病室からガラス戸を透して見えるよう
にしていた。月に映えてそのブリキ屋根が明るいというので、
子規の病臥の位置からは月は見えていない。第五首にみえるよ
うに、月は小庇にかくれて見えないので、一目見ようといざり
寄ったけれども見えないのであきらめている。かなり長い間、
ランプを紙で掩うて室内を暗くして外を眺めたり、それでもラ
ンプの影がガラス戸に写っていらいらしたりしながら、かなり
長時間飽かず眺めていたものであるう、やがて照る月の位置が
かわったのであろう、鳥籠の屋根に映っていた影がなくなつて
しまった(第七首)。時刻はいつのころであらうか、第四首に
は「月フケワタル」とあるから、かなりふけているようである
が、第八首には「浅キ夜ノ」とある。夜ふけとしたいところ
であるが、第十首に「汽車行キ返ル」とあるので深夜でないこと

がわかる。この最終句はだれもの耳に残るあのなつかしい音で
ある。

その後、四季の移り変わりとともに、子規の小園の自然も、
周辺から上野の森にかけての遠景も、徐々に変化するのを敏感
にとらえて子規は詠んだ。しかし、ガラス戸に馴れるにつれて、
ガラス戸そのものにちなんだものを詠うことは少なくなった。
わずかに

ガラス戸や暖爐や庵の冬構

三三年

山吹の雨やガラスの窓の外

三四年

春の日の雨しき降ればガラス戸の曇りて見えぬ山吹の花

三四年

ガラス戸のくもり拭へばあきらかに寝ながら見ゆる山吹の
花

三四年

暖爐タクヤ雪粉タトシテガラス窓

三五年

ぐらいのものである。しかし、ガラス戸とはなくとも、このガ
ラス戸越しにながめて詠んだものでままとまったものに、「病床
ノナガメ」九句(三四年)、「病牀所見」三句(同)、「病床
口吟 室外」六句(三五年)などがあり、子規の姿をほうふつ
と思ひ浮かべることのできるものに、

臥シテ見ル秋海棠ノ木末カナ

三四年

首あげて折々見るや庭の萩

三五年

がある。ことに後者は、八月下旬、庭に咲き始めた萩を詠って
丁堂和尚に贈ったもので、よほど以前から、字を書くにしろ、

絵を描くにしろ、首をあげる力がなくなつた子規は、頭を枕にうずめたまま、おもに紙を持った左手を動かしてかいていたといふことを思うと、小園への執着のほどがよくわかる。そして、それを可能にしたのはガラス戸であつた。また、辞世となつた糸瓜の句も、ガラス戸越しに見た棚の糸瓜を詠んだものであることはいうまでもない。

(昭和五十九年三月例会講演) (松山子規会幹事)

『子規遺芳——松山子規会史——』

に寄せて

一 今井つる女先生のご書簡

いつも御無沙汰申上てをります。春が一時に訪づれまして、東京も葉桜となりました。

さて、此度は子規遺芳を頂戴致しましてありがとうございます。存じました。

子規会の創立から四十年間の略史、これをおまとめになりましたこと、並々ならぬ御骨折と拝察申上りました。ところ／＼拾ひ読みを致し、私も長生きしたものとつく／＼思ひました。服部嘉香様の角帽姿もはつきり覚えてをりますし、景浦先生は女学校の四年間お世話になり、先生の歴史の時間が一番たのしみでございました。鳴雪翁はよく句会にゐらして頂きましたし、

古稀のお祝には赤い前掛で働きました。子規五十年祭のときのこと、いろ／＼思ひ出し、懐しく、ゆっくり拝読したいとたのしみにしてをります。(下略)

二 村上杏史先生のお言葉

(前文略) 扱て、此度は貴重なる松山子規会史御恵送を賜り、詢に有難く拝受仕りました。長年に亘る貴重なる御記録にて、初めて知る事柄も多く、耽読して勉強させて頂きます。就中第四〇頁梅津寺海水浴場のこと、田中蛙堂様御発言に出る俊成比古次郎は松の祖父であります。思はぬ処に祖父の名を見て驚き且欣喜致しました。栽松之碑は現在も梅津寺見晴山麓(昔の停車場前)に建つて居りますが、顧みる人はありません。詢に有難うございました。不敢取御厚礼申上ます。 敬具

後記 当会発行の『子規遺芳——松山子規会史——』をお贈り申上げましたところ、両先生から編集者にあててこのようなお便りを下さいました。ただ単なる読後感だけでなく、それぞれ興味深い内容がありますので、掲載させていただきました。平素のご指導とご協力への感謝にあわせて、厚く御礼申上げます。

なお、この書は、単なる歴史的記録にとどまらず、講演記録などに興味のある内容が見られますので、全会員のご協力をお願いします。(越智通敏)

越智二良宛柳原極堂書間

先年『柳原極堂書翰集』編さんの当時、あまりに寄稿が多か
 ったので保留した私宛の私信が漸次紛失、やがて散逸必死なの
 で、この際全部整理するつもりで一応越智通敏先生の一覧に供
 したところ、一部を本誌に掲載されると、発信日時や事情の
 確認を求められた。しかし、記憶も喪失し、調査の余力もない
 ので、多くはそのままに終って全く申し訳ない。ご参考になる
 ことがあるものについては、末尾に「備考」を付記した（越智
 二良）。
 （编者付記 文中句読点にあたるのは一字画あけてありま
 す。）

一 昭和24年2月7日（書簡）

伊予鉄庶務課富田狸通様 越智水草様

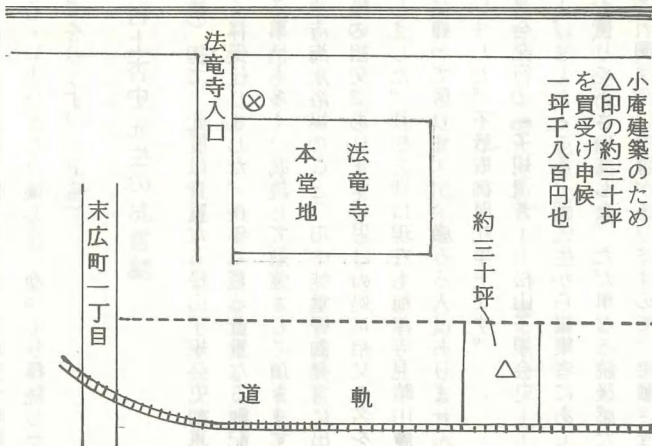
末広町子規堂 柳原極堂

法龍寺和尚ハ永久ニ印の地を貸与するから大ニ

やらぬかと申くれ候へども 金が出来るか如何 成

績不明の間ハ之ニ応じかね

△印の自分の地で甘んずることにいたし居ります



(封筒余白書入れ)

ウラを見てください 別紙蛙堂氏へ御願舛

建築を熊寛次郎さんといふ大工さんに頼みました

一月十日起工 二月末日迄二竣工 這入り得るやうするとい

ふ約束ニ候

集金の方が追ひつかず心配

二 昭和25年2月3日(はがき)

松山市中一万町 越智二郎様 水草様

豊坂町子牛庵 柳原 極堂

明日が立春とか まだ当分寒いでせうが 下り坂ニなつて一
日くくと春めくのをうれしく思ひます 御健康ハ此頃如何です
か 御用心専一ニ願ひます 二月八碧(二月一日) 零月(

二月十五日) 鳴雪(二月廿日) 右三故の祥月ニ当り 虚子

の出生が二月二十二日でありますから 二月十九日の子規会例

会ハちと盛んニやつたらと思ひます いづれお目にかゝつて委

しい事は御相談したいと思ひます

備考 二月一日は碧梧桐の誕生日でもあり十一日は極堂の誕

生日

生

三 昭和25年2月7日夜(書簡)

松山市中一万町 越智水草様

末広町子規堂 柳原極堂

舌代

先日ハ御光来奉謝候 佐川氏の氏名判りかね 談古会城戸氏

へ問合せ候処 同会賛助員に南吉井村北野田三〇八佐川隆英と

いふがあり それではないかとの返事に候 多分同人ならんか

と存候(中略)

本月の子規会のせつ 小生

子規会役員諸氏ニ要望す

といふ題にて二三十分希望申述度 出演諸君の間へ(願くは諸

君公演の初頭に) 御加へ被下度奉願候

會計

桂會計幹事より小生へ仮ニ引つがれし金 其他収支次の如く

相成居候間 新會計へ御示をき被下度

収 入

金百六十五円

会金残りとして桂氏より預りしものニ候

支 出

金三百円

二十四年十二月卅一日 景浦氏へ寸志

金三百円

二十五年五月十二日 菅会長告別式へ香奠

差 引

四百三十五円 柳原取替

桂氏の引つきの時の言ニ 景浦氏ニハ毎会お世話ニなるから寸志として盆と歳暮に三百円づゝ寸志を贈りつゝあり云々 其言を守りて昨年暮右の通り寸志を贈り候 今盆の分ハ新会計の御考もある事ならんと存じ差控へ居り候

いろ／＼他に感想も有之候へど 其余ハ拜顔の時を相期候

七月十二日

越 智 様

柳 原 生

(同封別紙)

景浦先生の会費は申受けぬ事にせうといふ事を桂会計は申し
てゐます

私案は 役員全部の会費ハ申受けぬ事にするがよいと思ひま
す

四 昭和25年5月20日(はがき)

松山市中一万町 越智二良様

市内豊坂町 柳原正之

昨十九日子規会出席七名 役員ハ一名も出席無之 小生代て
開会 会長菅翁の物故と告別式に子規会を代表して参列 香奠
を捧げし顛末報告の後 規約に拠り会長推薦の^{はが}ことを商り 一
二意見ありしが 結局菅氏の無二の友でありし関係もあり 又
子規会創設以来尽力されし景浦直孝氏を推薦することに決定

いたし候 尚 幹事は新会長の指名によりて増補することゝい
たし 幹事の互選にて会計主任を設け 会費徴収に着手すべき
ことなど申合ひ散会致候 右大略御報告申上候 以上

五月廿日

五 昭和25年11月23日(書簡)

伊予鉄庶務課 越智水草様

柳原極堂

舌代

先日の会にはお顔を見ませんでしたでしたが、御健康の関係ではあ
りませんかと心配してゐます

別紙(葉書)三枚戻りました 台帳御手入れ可然願ひます

田中実乗君ハ肩書正当と思ひますのに戻つたのは不思議にそ
んじます 番地でも記入したら判り易いのかも思ひます 高
柳町市管住宅ハ並んで十軒ばかりあるばかりですから たづね
て判らぬ筈は無いと思ひますが 此頃の配達夫ハ若い人で 根
気よくさがさぬのかと思ひ舛

先日(十九日)の子規会は 清水、菱田二君のお話が相当長
かつたので あとで会長から子規居士五十年祭計画についての
お話が鳥渡^{ちよつと}ありましたが 已に日没ニなつてゐたので誰も余り
口をきかず 匆々に散会しました 五十年祭計画も已に二三ヶ
月前からの話で 毎会同じ様なことを話して散ずるのでは 何
日までたつても実行の端緒につく時は来ないと思ひますので心

配してゐます。会長さんと御相談で。近日子規会の役員会を開き、その話合の上で他団体へも渡りをつける段取りを取つてくださる様ニ希望に堪へません。私も老はれてはゐますが、やれる丈の事ハつとめませう。子規小伝の資金(約三万円位のものか)あつめにでも当りませう。御高慮のほどお願ひ申上ます。

十一月二十三日

柳原生

越智大兄

備考 五十年祭計画は愛媛新聞に掲載(『子規遺芳』一三〇P参照)、子規小伝は、極堂翁の口述を光田稔氏がまとめ『子規の話』と題して市社会教育課より発行。

六 昭和26年5月11日(はがき)

松山市中一万町 越智二良様

豊坂町 柳原正之

承るところでは、又々御持病のため寝込まれたさうですが、昨今御模様如何、天候がかたまれば自然御回復と察します。御自愛を祈ります。

一 昨日小庵で御役員連の協ギ会あり、結局与算^(予)一万三千余円

子規会が集め得るハ約五千円、残り不足分ハ立川氏が出すこと、建碑に関するパンフレットと紅白の重餅を来会者ニ配ることなど協定ニなりし由、私ハ例のツンボ故何も聞えず、唯四時

間座つてゐただけですが、御散会の際稚桃先生から御説明で承知しました。

お見舞迄

備考 以下三通は中の川の紅梅の歌碑建立に関するもので、

同碑は、極堂翁が立川明氏の好意を得て完成、専ら菱田正基・宇高久敬両幹事らが衝に當つた。

七 昭和26年6月13日(はがき)

松山市中一万町 越智二郎様

豊坂町 柳原正之

御健康如何哉、御大事ニ御保養祈ります。小生も已ニ一ヶ月以上の引籠りで閉口しますが、暖氣ニつれて日を追ひ回復することであると氣永に構へてをります。

歌碑除幕式の費用の不足で立川氏へ出金を求められた由ニ聞きますが、それも悪くは無いとして、碑石を現場まで運搬する五千円程の金の出所がきまらず困つてをらるゝ由本日宇高氏から聞きました。除幕式の費用よりも此の方が先決問題ではないかとも想ひます。御見舞をかねて、匆々

八 昭和26年6月13日(はがき)

松山市中一万町 越智二良様

豊坂町 柳原正之

除幕式の費用補助を立川氏へ相談するのも悪くはないであろうが、歌碑運搬費の五千円程が出所が無いとすれば、之ハ立川氏へ出金を相談するのが順序となるだろうと想ひます。それを後へ廻して除幕式の費用を先きに立川氏ニ相談すると、運搬費の時に相談するのが言ひ出し悪くて困りはせぬかといふ心配をもちます。幹事諸君は先づ此運搬費の五千円の方を御解決の必要あらんかと思ひます。如何のものにや

九 昭和26年7月2日(はがき)

松山市中一万町 越智二良様

豊坂町子規庵 柳原正之

御健康ハ其後如何哉 梅雨もモウ二三日で明けることと思はれます此際 御病氣を払はれて御起遊ばされ度お祈りします。予て計画の子規記念堂兼文庫ハ落成しました。是全く同情各位の賜 深謝いたします。句碑ハ目下石手大谷氏で刻んでいます。数日後ニハ送り來ることゝぞんじます。それが建ちましたらば 子規会の名に於て落成を公然発表いたし度いと思つてゐます。私の腕に叶ふだけのことは仕遂げました。今後ハ主要行事 それハ諸君でないと出来ません。御高配を願ひ外

備考 子規記念堂兼文庫は、昭和二十四年建立の子規庵の玄関向かつて右(西側)へ接続して増築、現存。句碑「粟の穂のこゝを叩くなこの墓を」はその南庭に建てられた。

一〇 昭和26年12月26日(はがき)

松山市中一万町 越智二良様

中の川法龍寺裏 柳原 正之

御健康其後如何哉 実ハ小生去十一日ごろより流感と喘息にて寝込ミ、食欲全く無くなり、口が利けず、老人のこと故今度これが最後とあきらめ居りましたが、二十日頃からポツポツとあともどり、発音も出来、流動物も摂れるやう相成り、人心地出来、新聞などものぞく様相成りましたところ、昨日狸通道人よりお手紙いただき、水草さんも其後ズツお休みですと書いてあったので驚きました。あの後つゞいてお休みとハ、誠ニ御難波の御ことゝ拝察いたします。同病相憐れむとでもいひますか、覚束なき筆とりてお見舞申上ります。

一一 昭和28年1月9日(はがき)

温泉郡北条町新立 越智水草様

松山市豊坂町 柳原極堂

昨今寒気つよし御用心くださいませ。本日ハ私受賞のよろこびとして御祝詞をいたゞきありがたう存じます。然るところ私の受賞理由ハ子規居士顕彰といふ風になってはいますが、私独力で出来るわけのもので無く、同志と共に平生協力してやって居る次第で、其点から考へ、同志一同が受賞したものと心得ています。何にせよ、子規が地元民から認識され始めた証拠で

今より数年前でしたら 子規顕彰などが受賞されたりすることはなかったらうと想ひます 此点欣快に堪えませんが 御同慶の至です

備考 昭和二十八年一月、翁は第一回愛媛文化賞（現在の愛媛新聞賞）を受賞された。ちなみに景浦稚桃翁の受賞は第三回である。

一一 昭和28年3月23日（はがき）

温泉郡北条町 越智二良様

松山市豊坂町 柳原 正之

いよく春ニ相成りました お互ニ凌ぎ易きが何より結構ニ存じます

一昨日ハ御祝詞ニあつかり痛み入っています 他の四氏ハそれく文化上に功績あること誰の目にも著しく分明なれども単り小生に到つてハ何の採るべきものも無之 これは謙遜にていふ訳ではなく 真ニさう感じをりますが 辞退してハ奇を求むるものと評されんかと心配して 成行に従つてゐます 御笑ひなきやう願ひます

手のひらにいたたく春の光かな

備考 昭和二十八年三月、翁は第一回愛媛県教育文化賞を受賞された。他の四氏とは、景浦直孝・能島通貫・菅原利鏖・

八木繁一氏である。翁は、このほかに、三十二年七月松山市名誉市民、同十月県民賞と数々の榮譽に輝かれた。

一三 昭和29年7月20日（書簡）

温泉郡北条町 越智二良様

松山市 柳原正之

前略 昨日ハ雨中を御来会 誠ニ御迷惑のこととお察し申上ます 小生ハ此頃耳がズットために相成り 昨日の如きも皆様の御言葉一切き取り得ませんでした 景浦君の言葉の内に自分の話すところすべて子規に多少の關係のあるものだと言はれしは耳に入りました 兎に角 私ハ今日の幹事共の為すところは感心が出来ぬので 先づ第一に解散の石を投げ込んでみたくです 決て景浦氏に対立して感情でこんなことを致すのではありません 私の死にがけに子規会の将来をいろいろ心配するものです 是が老婆心といふものでせう 昨日の御決議で満足するものではありませんが 新聞の人等も見へてゐるので 会がヒドクもめた様に書かれ度くなく 昨日は提案後無言で済みました 本日野田邦彦氏来庵 先生の本意は私にはよく判つてゐますと言はれましたが どんなに判つてゐるのか 私ハ今日の会長や幹事のやりかたは大ニ刷新せねばならぬと思ひます 曾我正堂氏本日葉書を寄せられ 解散に賛成だ 今日のような子規会のあり方でハ意義がないと書いてありました 私ハ同感であります

昨日は雨の中を貴兄や蛙堂君を煩はしたことを恐縮しています
大略ながら一言謝意を表し度 此葉書を認めました

梅雨が余り長くお互に閉口いたします 御健康御用心遊ば
(さ)れ度 千万御祈り致します

七月二十日

柳原極堂 拜

越智水草様

備考 昭和二十八年三月の例会以降十二月まで、景浦会長は
毎回赤穂義士を主題とする講話をつづけ会員の興味を呼ん
だ(『子規遺芳』参照)。このことが子規中心の極堂翁の
反感を買ひ、両者の不和を来たし、ついに極堂翁は子規会
解散を唱えるに至った。新聞にも報道され、野田邦彦・曾
我正堂氏はじめ極堂翁旧門下の人々も賛同、子規会最初の
危機であった。

一四 昭和29年9月21日(書簡)

温泉郡北条町 越智二良様 侍吏

松山市豊坂町 柳原正之

拜啓 一昨日十九日の子規五十三回忌には正宗寺にてお目に
かゝれるかと予想せしに お目にかゝり不得 御病氣などの関
係かと心配いたしますが 御近況如何哉 日中は残熱相当
きびしく 朝夕ハズット冷へこみます 私共老人にハこれが実
に懸念さるゝ危険状態であります 御病弱の人々にも御同様
ならんかと拝察いたします 何卒十分御用慎遊ばさるゝ様祈り

ます 次に小生將に老齡八十九歳ならんとし 人生の高峰に達

したる感がいたしますので 此辺で隠居をいたし 公的世事に

ハ一切身を退く覚悟をいたしました 今後は悠々自適 全く閑

散の余生をたのしみ度存じます ついては 自然松山子規会員

も退却致すことゝ致します 久しくいろく御世話様に相成り

しことを謹謝いたします 会長御辞任とか聞きますので 副会

長の貴下へ右御挨拶いたします 言外何等秘するところあるも

のに無之 真に世外にさがり度き希望故 いろくの推測談な

どあるとても それは御信用無きことに願ひます 小生ハ何人

とも予め語り合ひて策動いたすなどの事ハ無之 すべて自己信

念で動いてをります 右の退隱の如きも 本日三好幾次郎君丈

にハ洩らすつもりでをります 他にはまだ誰にも語つてをりま

せん

子規会も 私が退きましたら早速様相が變つて来ること明白

何卒副会長様の御支援によりて旧態を維持したきものと希望

いたします 謹言

九月二十一日

極 堂

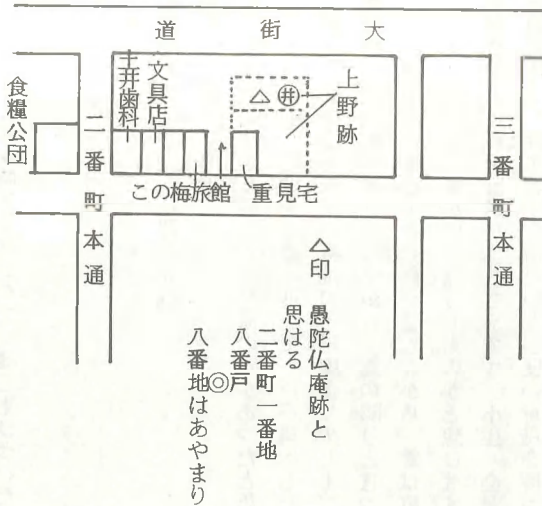
越 智 水 草 様

(別紙)

田中某氏の努力にて(小生の合力)夏目漱石 子規居士同宿
跡(二番町一番地八番戸上野屋敷)左記の如く略分明いたしました
した 標木建設等にて観光協会より照会有之候節ハ可然御指図

被下度

拙著友人子規に八番地と記しあるハ 八番戸が正当にして
拙著ハ誤りニ候



備考 子規例会では多数をもって解散に反対、永久存続と
決議し、極堂翁は退会を申し出、景浦会長は辞意を表明し
た。「いろいろの推測談」とあるのは、一部に極堂翁を中
心とする別個の子規会組織説などが伝わったのをさすもの
か。

一五 昭和30年1月16日(はがき)

温泉郡北条町字新立 越智二良様
松山市豊坂町 柳原正之

正月十五日は旧暦でせう

子規に「梅さげて来る礼者や十五日」といふ句がある筈です
正月十五日ハ小正月とも女正月ともいふ筈に記憶しています
関東ハイザ知らず 関西でハ十五日に松を納めるので松納め
ともいふ様に思ひます 其松納めの日に間に合ふやうに来た
礼者は誰であつたのでせう 何か調べたら(子規文献を)判り
ませんでせうか 私ハ何となく内藤先生でないかと思ひます
梅花を手土産にさげて来るなど 鳴雪先生らしい感じがいたしま
す

昨今風のある日はことに寒し 御自愛あらんことを祈ります

備考 昭和三十年一月より一年間、朝日新聞愛媛版の題字の
下に毎日連載した「子規歳時」に対し、極堂翁はしばしば
題材を提供した。

一六 昭和30年1月16日(はがき)

温泉郡北条町字新立 越智二良様

松山市豊坂町 柳原 正之

朝日新聞の購読を始め 毎日子規歳時をおもしろく拜誦して
ります

子規の明治廿六年以後何年でありしか「新年の根岸うつくし笹の雪」といふやうな俳句がある筈です。笹の雪ハ豆腐の名でシカモ其の料理を食はず(豆腐料理)ために料亭の名にもなつてゐたのでせう。シヨウシヤな料亭であつたのです。相当名も通つてゐたのです。後年加藤拓川がシベリヤか(調べぬと判らぬが)外遊の時、子規ハ笹の雪を拓川へ送つて何か句もあつたと思ひます。調べるのが時間がないので、唯をもひついただけを此処に記しました。

一七 昭和30年1月17日(はがき二枚つづき)

温泉郡北条町字新立 越智二良様

松山市豊坂町 柳原正之

子規に「鶯の隣りにはそき庵哉」こんな風の句があつたと思ひます。明治二十五年暮、母妹を東京に迎へて一戸を構へしハ上根岸八十八番地(後の現在八十二番地の子規庵より少し下)にて、陸羯南の邸の向ひ側でありましたから、鶯の隣りと言つたのでせうが、此地を俗に鶯横丁とも称えましたから、鶯は町名にもかよひ、又、陸羯南にもかけて詠せしものかと想ひます。明後日の子規会に、役員の改選があるさうです。小生ハ会長以下すべて全員重任とし、幹事若干を増員いたし、度い意見を持つてゐます。現在ハ、淡紅、水々、幾次郎三幹事で運営側を担当いたし、他の幹事ハ大方有名無実で、出席もいたさない實際です。三四名新手の幹事を加へてハ如何と思ひます。会前に

一度景浦君を来訪して懇談して見やうと思ひますが、寒くてなんばにも外出の勇氣が出ません。残念に思ひます。会当日に貴兄の御出席を得ると大変便利だとも思ひますが、昨今の寒さでハそれも無理な注文かとも存じます。御都合で出られたらばお出でくださいませ。お願いいたします。(つづく)

最新刊

松山子規会叢書第一六集

不器男句文集

塩崎月穂編・発行 二五二P

頒価一、六〇〇円 送料二五〇円

お問合せは 塩崎月穂まで

今治市常盤町五二二一三
電話(〇八九九)四三一二六五

子規会誌 二二二号

季刊(四、七、一〇、一月)

発行日 昭和五十九年七月十九日

発行所 松山子規会

松山市末広町正宗寺内

郵便振替徳島二一八六八

印刷所 青柳堂

松山市東長戸二丁目二五

より印象深く、感動的に
松山全日空ホテルがお手伝いいたします。

ご婚礼ご予約承り中!!



参列の皆さまの微笑みとよろこびの言葉につつまれて、なごやかにくりひろげられる披露宴。ここをこめた料理のかずかずが一層その場を盛りあげてくれます。西洋料理・日本料理・中国料理のそれぞれを一流コックが心をこめておとどけいたします。

●お問合せ・ご予約は宴会・予約まで



松山全日空ホテル

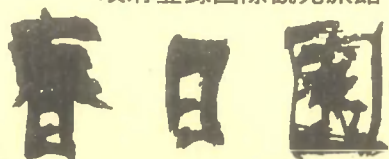
〒790 松山市一番町3丁目2-1

☎(0899) 33-5511

ホテル春日園で挙式を

人生のスタートを春日園は華やかに
厳かに演出いたします。

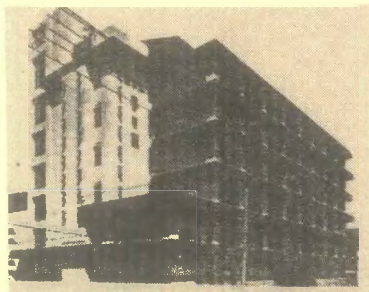
政府登録国際観光旅館



ホテル

〒790 松山市道後鷺谷町3-1

☎ (0899) 41-9156



お食事処…かすが…

石畳, 格子戸, 木の香もかぐわしく
くつろぎのときに情緒ひとしお



伊豫名産店
島屋

四国松山・道後温泉
TEL (0899) 21-5582

自費出版のご用命を…

企画・編集その他自費出版についてのご相談に応じます。
お気軽にお立寄りください。

AOBA 図書出版・一般印刷

松山市小栗6丁目3-23 (有)青葉図書 ☎(0899)43-1165(代)

¥ 300